

地方銀行の製糸金融と繭担保倉庫の発生

明治二九年竣工 旧本庄商業銀行煉瓦倉庫建設過程からみる地域産業発達の近代的特質

本橋仁

わが国において煉瓦造建造物は、幕末から昭和初期のごく短い期間において建設されたに過ぎない。銀座煉瓦街の失敗や度重なる地震被害によって、ついには一般的な普及に至らず、日本の近代化に供したその使命を終える。そうした、限られた時代の建築であるからこそ、煉瓦造建造物は明治からの急速な近代化の象徴ともなり、富岡製糸場の世界遺産登録をはじめ、昨今、価値の再認識がより進んでいる状況にあるといえよう。しかしながら、煉瓦造の研究はといえば、未だ建設技術そのものも不明な点を多々残す、不十分な状況にある。

そこで「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」（以下、本庄煉瓦倉庫）を通してその歴史的価値を分析するとともに、近代化遺産そのものの評価軸の再検討を試みた。これまでの特に近代化遺産の評価については、わが国における同時代的先駆性や特異さに注目が集まり、地域においての、という意味での評価軸は蔑ろにされてきた。そうした問題意識のもと本研究に着手したものである。

本報告では、前述の通り埼玉県本庄市にのこる本庄煉瓦倉庫を、主たる対象としている。まず、報告者がおこなった実測調査より本庄煉瓦倉庫の概要と特徴を述べたい。詳細な実測から、例えば腰壁のもつ吸水性の違いからは環境性能面や、正面計画の可能性について指摘した。さらに網戸と板戸の並置された開口部の建具などの環境性能の担保を指摘し繭担保倉庫というビルディングタイプのもつ建築的特徴を報告したい。

その上で、さらに同時代における文献である、蚕糸業の技術書から繭の保管要件について整理をおこなった。そうした要件がいかに各種建築計画によって満たされているかについて分析した。なかでも重要な指摘は、通気計画に対するものと考えている。いかに湿気を嫌う繭の保管環境を、煉瓦造建造物の繭倉として建設するかの工夫について明瞭に示したものである。

そうした環境性能と同時に、煉瓦造建造物の技術に焦点を当て、本庄煉瓦倉庫の構法について分析を試みた。煉瓦造建造物に関する、わが国における先行の研究においては、煉瓦組積部のみを対象とした研究、例えば煉瓦モジュールが主流であった。しかし、本報告では煉瓦組積部と木軸部との関係性を分析するという新たな視点を用いて、これまでに無い方法で煉瓦造建造物の明治中期における建設技術の水準を計ろうとしたことに触れる。異なる構法の系が混合する煉瓦造建造物において、系の交錯する部分において矛盾が発生し得る。そうした否応なく発生する矛盾に対する解決法をみることで、明治中期に至るまでの、日本の煉瓦造技術の段階を見ることができた。

さらに、本庄煉瓦倉庫の建設主体に注目もした分析をおこなった。研究の過程で、清水建設株式会社に所蔵された資料の存在から、同社の前身である清水店が設計施工したものであること、

また設計者や竣工年などがあらたに判明した。また、繭を担保とした銀行の設立について、明治中期における本庄地域の交通網の発達と、それゆえの周辺地域の大規模製糸業者の進出という生糸金融的視点から明らかにしている。

さいごにそれらの結果を統合し、繭担保倉庫の基礎的研究、また本庄商業銀行とその煉瓦倉庫の建設背景より、地域産業発達の一断面を示した。なかでも、諏訪地方までを含めた周辺地域における繭倉との比較のなかで養蚕技術の近代化と建築生産、とくに煉瓦生産との関係性を明らかにし、本庄煉瓦倉庫のような煉瓦による繭倉が成立し得た時代的かつ時代的な背景を捉えた。

以上、本報告の要するところ、その新規性は2つ挙げられる。1つは、繭担保倉庫の機能と技術という多角的視点をもって、煉瓦倉庫を分析し、さらに明治中期煉瓦造の建設技術を、組積部と木軸部の一体的な研究を行ったこと。もう1つは、そもそも本庄商業銀行のような仕組みの銀行は、なぜ発生し、さらには煉瓦造によって建設することが出来たのか。そうした成立要件について煉瓦生産地域の偏在に着目をして明らかにしたことである。